

誕生日に母を語る



誕生日は年に一度自分を産んでくれた「お母さん」を思う日…。

母の手料理が、今の私をつくってくれた

杉本真美 (35歳/平塚市)

今日は私の35歳の誕生日。母に初めて「産んでくれてありがとう」と手紙を書いた。

書きながら思い出すのは、料理をする母の後ろ姿。母の実家は自営業で、食事はほとんどがお店で買うお惣菜だったそう。味気ない食事を食べながら、母は「自分が大きくなったら食事は手づくりしよう」と心に決めていたらしい。

料理学校に通い、若い頃から祖母に代わり食事をつくった母。料理の腕と手際の良さは、私には一生かなわない。インスタント食品や出来合いのモノを嫌い、どんなに忙しくても毎日手づくりの料理を

用意し、決まった時刻に出してくれた母。母が料理に込めた思い(愛)は私の血となり肉となり、今の私が存在する。知らず知らずに「愛」をいっぱい食べて成長した私にも「家族の食事は、手づくりするもの」と自然に身につけていて、やむを得ずお惣菜やインスタントに頼る日は、心のどこかに罪悪感すら感じてしまうほど。そして、つくる食事は常に「薄味」を心がけている。そんな母は想っていることを素直に伝えるのが下手で、母の口から「愛してるよ」や「大好きだよ」と聞いた覚えが全くない。手をつないで歩いた記憶も、抱きしめられた記憶もなく、子どもの頃は母に「心から愛されている」と感じたことがあまりなかった。

でも、毎晩寝る前に本を読み聞かせてくれていたのは覚えていて。本好きの母が「本好きな子になるように」と思っていてくれたことらしい。母いわく「失敗した」らしいが、私は母のすすめる本だけは読み、母の価値観をそこで学ぶことができたと思っている。今、自分が「母」になり、「母としての自分」と向き合うとき、母の存在そのものが「愛」

オババの育児日記

オトコ兄弟もいいねえ!

たっくんが3歳のとき、弟(とうま)が生まれた。たっくんは、弟がママから生まれてくるのを体験学習?した。3歳の子にとって、出産の立会いをするというのは、どんな気持ちなんだろう。



絵本を読むふたり

出産直前、ママが陣痛で苦しんでいるとき、両手を合わせて祈っていたたっくん。あれから6か月。とにかく弟がかわいくてたまらない。誰に教わったわけでもない、毎日の生活の中で、とうまの面倒を見るのは自分の仕事だと思っている。

とうまがおしっこをしたらママに報告し、とうまが泣いたらあやすたっくん。最近では離乳の食べさせ方もすっかり覚えた。こうして自然に、兄弟になっていくのだろう。

つい先日のこと。2人が絵本を読んでいる姿に、オババは思わず感動!子どもの成長とは、なんて素晴らしいのだろう!

編集部遊びに来て帰るときに、私がとうまを抱っこしていると、「とうまも持って帰るからね」と不安そうに言う。「とうま君は、置いていって」と言うと、「ダメッ!」と真顔のたっくん。とうまがいなかったら、ママを独占できるのに…。

これが、兄弟愛? たっくんにとってとうまは、もはや、なくてはならない存在。弟がいるからこそ、小さい子へのやさしさやいたわりの心を、自然に学んでいる。兄弟っていいね。

今は、ただにっこり笑う弟との時間が、たっくんにとっては「ハニータイム」。だが、このハニータイムも、時間の問題だろう。オトコ同士の激しい兄弟げんかもそろそろ始まるに違いない。宝物のミニカーも、奪い合いになるのかな? そんな2人も見てみたいもの。ちょっと弱そうなたっくんだから、弟に負けちゃうかも。2人がこの先どんな大人に育つか、オババの楽しみでもある。

ちなみに、うちの3人娘。小さいときは仲良しだったけど、思春期の頃はけんかばかり。そして大人になった今、再び仲よし3姉妹に。オンナの子しか知らない私だが、オトコの子の兄弟も、なかなかいいものだ。

先日、娘がたっくんととうまをうれしそうに眺めながら、「私も信子かあさんを目指そうかな」とポツリ!が、隣にいた貧乏新聞社勤務の夫は、複雑な顔をしていた…。

大丈夫。お金がなくても何とかかなるけん。ねっ!信子かあさん、夫の英治さん!何と

いっても、子は宝(財産)だね。(藤本オババ)

離乳食をあげるたっくん

池川クリニック 横浜市金沢区大道2-5-13 TEL045-786-1122

「胎話音楽」CDが、できました!

最近健康と振動の関係が注目されてきています。音の振動が周波数の違いにより、モノに秩序を与え、自然界に存在する気管支や血管の走行に見られるフラクタルパターンが生じることが知られています。音がモノに与える秩序を使って健康を維持したり、音のエネルギーを温度に変えて病気を治したりする試みが行われています。



池川クリニック院長 池川 明

■帝京大学医学部大学院卒、医学博士。1989年横浜市に、産婦人科「池川クリニック」を開業。「胎内記憶」の研究発表がマスコミで紹介され話題に。著書やDVD多数。

音に癒す力があるとして、「ヒーリングミュージック」という言葉をつくった故・宮下富実夫さんは、ご自身の音楽を科学的に研究。その音楽で安らいだときに出てくるα波、θ波という脳波が出ることも確かめています。これは座禅を組んでいるときに出てくる脳波の波形と同じパターンです。私も試してみましたが、疲れているときにその音楽を聴くと、脳を柔らかくマッサージしてもらっているような心地よい感じがしました。お母さん100人にアンケートをとり、人気の楽曲を集めた「マタニティ・リラククス・ミュージック」が出されました。福田病院(熊本市)の福田先生と、音楽家の神山純一さんは、妊娠中のお母さんから胎内音を録音しています。どのように音を録音したかという、予定日を過ぎて分娩誘発をするときに、子宮の中に入れる風船の先端にマイクを付けて音を拾うのです。その音を聴かせていただきました。外の大人の会話、お母さんのハミング、お父さんの外からの赤ちゃんへの話しかけなどが明瞭に録音されています。従って、外の音は胎児に確実に届いているといえます。

食を支えるお母さん

無農薬栽培でつくる旬の枝豆を美味しく食べるコツ

「まめな農園」木村玲子さん(岐阜市 62歳)

夏といえば、塩が適度に効いたゆでたての枝豆で決まり! 熱々の枝豆は、コクがあつてぷちつとした食感が本当に美味しいものです。

子どものおやつに、お父さんの晩酌にと大人気の枝豆ですが、近頃日本では、一年中居酒屋メニューとして出される背景には中国や台湾産の冷凍物が増えているのが現状です。しかし、夏に収穫した旬の生の枝豆こそ、日本ならではの食の風物詩。

今回は、無農薬栽培にこだわってつくっている、岐阜市の木村佳志雄さんと息子の仁士さん、そして2人を支えるお母さん、木村玲子さんをご紹介します。

3人の子どもを育てながら、

「子育て? 農作業の傍らだったんで、子どもらに、手をかけて育てた記憶が全然ないね。ハッハッハッ!」(笑)。現在は、末っ子の仁士さんを中心にして、畑の仕事を行っています。

「何ととっても健康が一番夢は、家族みんなが病気にせず、ずっと健康でいることです。野菜思いで家族思いの玲子さんならでの夢、きつと叶うに違いありません。ところで、おいしい枝豆の湯がき方について聞きました。「コツは、3回塩を使うこと。軽く洗った枝豆を湯がく前に塩でもんでうぶ毛を取る。すると、ちよつと色があざやかになるんですよ。それを塩を入れた熱湯でゆがき、ザルにあげてまた塩をふる。湯がいた熱い枝豆は、決して水にさらして、冷やすのはダメ。味が落ちます。熱はうちわでさくさくあおいで冷やす。これでおいしい枝豆になります!」。



「枝豆づくりはお任せ!」と息子さん★木村さんの枝豆を3名様にプレゼント!

取材協力 ● にんじん CLUB http://www.ninjinclub.co.jp/

「胎話音楽」CDを楽しんでいただければと思います。

※お母さん大学事務局で販売中。TEL, FAX, メールでお申込みを!

読者プレゼント!

2名様(2500円相当)応募は8頁のプレゼント同様、「胎話音楽」希望と書いて応募ください。



読者プレゼント!

地域文化をそのまんま表現する子どもの言葉

text: 木村 乃

ビスデザイン株式会社 dk@biz-design.co.jp

言葉を覚えたての3歳くらいの子が「なんばしよんしゃあと?」(博多弁)とか、「何してはるの?」(大阪弁)とかって、声をかけてきてくれると、何とも愛らしい。

方言の丁寧語には「覚えさせられた言葉」という印象がない。小さいながらに、この地域の「文化」を背負っている。だからこそ、こんな小さな子がきちんとした言葉を自然に身につけているということに、健気さを感じるのだろう。

「文化」とは、ある特定の地域社会で共通する行動様式のこと。テレビ番組「はじめてのおつかい」にも、地方の子どもがよく登場する。その子たちの言葉づかいに耳を傾けてみてほしい。

言葉の一つひとつが子どもの印象、ひいてはそのまちの印象に大きく影響していることを実感するはずだ。

沖縄などの方言を真似たがる都会の若者も、心のどこかで文化的な郷愁を求めているのではないだろうか。

わが子と一緒に自分のルーツを探す「心の旅」に出かけてみてはいかがですか、お父さん。